もう君を離サナイ

吉良★すた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう君を離サナイ

【Ｎコード】

Ｎ５９８３Ｘ

【作者名】

吉良★すた

【あらすじ】

父親の転勤で小学校三年生の夏から　今までアメリカに住んでいた　工藤勇斗（くどうはやと）は、　父親の二度目の転勤で、Ｎ県渚町に戻って来た。

転校先の高校で出会う不思議なヒロイン達。　そして、再会した幼馴染の片桐咲（かたぎりさき）　だんだんと壊れて行く日常を止める事は　出来るのか？

作者のｉＰｈｏｎｅのデータが全て消えてしまったため、投稿出来

なくなってしまったので
名前を吉良☆すたから、吉良★すたに変えて
登録し直す事にしました。

ＩＤも変わっていますが、本人なのでこれからもよろしくお願いします。
今まで、読んでくれた読者の皆様
何かと面倒だと思いますがこういった形で連載を再開する事にしたので、よろしくお願いします。

プロローグ：別れのナツ

「あたしの事好きでしょ？大きくなったら、結婚しよーね！！約束だよ！（≧∇≦）」

「え～（´Д`　）イヤだ！！だって咲すぐ泣くんだもん！！それにオネショもするし、泳げないから海にも行けなくなっちゃうし、えっとぉ～他にはぁ～…」

「ふぇぇッ。・゜・（ノД`）・゜それ以上言わないでよぉ～。（（（（；゜Д゜）））））」

「わ、わかったから泣くなよぉ…（´・_・、）ジュースあげるからさぁ…」

「だってぇ、勇斗がひどい事言うから…（´・_・、）それに…もう、勇斗が居なくなっちゃうから…」

「うっ…でも仕方ないよ。父さんがアメリカの会社に行く事になったから…でも、すぐ会えるよ！

アメリカでもたくさん友達作ってまたいつか帰ってくるからな（^ー^）もしかしたら、アメリカ人みたいに、髪の毛が金色になって帰ってくるかもな（^ー^）」

「あははっ！勇斗にきんぱつなんて

似合わないよ！」

「う、うるせーし！！帰ってきても結婚してやんねーぞ！！（＞人＜；）」

「ふぇぇッ！それはヤダ～！！必ず戻って来てね…待ってるからね。」

「うん。元気でな…」

そして、思い出の詰まったこの町に大切な人を残して、オレは自由の国

『アメリカ』へ飛び立った！！

今から、八年前の夏。小学校三年生の頃の話である…

この頃は良かった…でも、戻レナイ…

転勤そして、転勤…

突然だが、オレこと工藤勇斗は凄く不安である。
理由は、小学校三年生まで住んでいたこの町に
帰ってきたからだ。何しろ、先週までアメリカの
カリフォルニア州に住んでいて、
がっつりアメリカンな暮らしに染まっていた
ために、日本での生活を忘れかけていて
当たり前の事が出来るか不安だったのだ。
ちなみに、なぜアメリカに住んでいたのかというと…
「えっと…靴は脱いで上がるんだっけ？」
「当たり前じゃないか勇斗（＾∇＾）！戻ってきて初っ端からそん
なのだったら、Ｈｅａｖｅｎにいる
Ｍｏｔｈｅｒが、哀しむぞ（´・｜・、）」
「ハイハイ…分かりましたよー
おかーさんさーせん！（棒読み）」
「おい！謝るならちゃんと謝れ（＾＾；；！しかしオレの嫁は綺麗
だったぞぉー！勇斗にも見せてやりたいくらいだ（＞人＜；）」
そう、唯一の家族工藤祐介の転勤によるものだ。
そして、会話から分かるように母親は
オレを産んですぐに亡くなったらしい…
親父（祐介）が言うには、アンジェリーナジョリーと、石原さとみ
と、ミッフィーを足して二で割り
そして、五をかけた位の美人さんだったらしい。
親父が写真を
亡くしてしまったためにオレが見る事は出来ない。あの親父…いつ
か潰したる！
とぅるるるるるるるる！とぅるるるるるるる！

「はいもしもし、こちら工藤です
あっ部長ご無沙汰してます。無事に日本にも着きました！えっ？ちょっ？それ本気ですか？
だってついたばっかりだし…あっはい…はい…
分かりました。」ピッ！

「話さなくてはいけない事がある…
落ち着いて聞けよ…勇斗…父さん、今度は
オーストラリアに行く事になった。」

「はァッ？マジで？オレはどうすんだよ？」

「その事なんだが、勇斗お前はどうしたい？」

「オレは……ここに残るよ…！だって
せっかく戻って来たんだし、入学手続きも済ませてあるんだし。さぁ、とっとと行った！オレも１８だ！いつまでもガキじゃないって事！」

「うぅっ。（ノД、）勇斗は成長したな！
ダディ嬉しい！」

「オッサンが泣くなよ（，・―・、）気持ち悪りぃ。
月一で、お金振り込むの忘れんなよ。」

さっきは潰したるなんて言ったが、
こんな親父でも、母さんが死んだあと男で一つで
オレを育ててくれた大切な家族だ。だから、
親父の仕事の邪魔はしたくない。

「じゃあ、行ってくるぞ（，・―・、）ノシ」

「今からかよっ！？」

そして、荷物を整理し終わって
いろいろな手続きも終わったオレは明日から
高校三年生ってわけだ。
てゆーか休みたい（＞人＜；）

転勤そして、転勤…（後書き）

とりあえず、二話まで再投稿中。

この調子であげて行くので
前にお気に入り登録してくれた皆さん
こちらをよろしくお願いします。m（＿＿）m
マジですいません。

やっと会えたね…

覚えていますか？あの日一緒に遊んだ公園を…
覚えていますか？イジメられていた私を助けるために自分の身体を傷つけてまでケンカした
あの空き地を…
覚えていますか？貴方が突然私に言った別れのコトバを…貴方は忘れてしまっているかもしれません…でも私は、全て覚えてます。
貴方が行ってしまう前に交わした会話の一語一句から、私との約束…そして、貴方に対する私の気持ち…全部覚えてます。貴方がアメリカに行ってもう、八年も経つんですね…私は貴方の事ばかり考えていました。
貴方はもう此処にはいないのに…
ずっとスキデ…

壊れてしまいそうです。

目覚まし時計がなった。花柄の可愛い時計だ。
この目覚まし時計は、今は、離れてしまった
幼馴染が、「お前はよく遅刻するから」と誕生日
にくれた大切な物なのだ。『いつも通り』に風呂
に入り『いつも通り』に朝食を取る『いつも通り
』に登校し、

『いつも通り』に帰宅する。この退屈極まりない日々が片桐咲にと
っての人生だった。
幼馴染がいた頃は、毎日が希望に溢れ生き生きと
していた。イジメられていた事もあったが、
幼馴染が助けてくれた。

彼女にとって『幼馴染』こそが全てだった。

そんな幼馴染の『彼』が居ない今彼女は死んだに
等しかった。

「いってきまぁす。」

『いつも通り』の通学路を通い、
『いつも通り』のクラスの自分の席に座る。

ただ、一つ『いつも通り』ではない事があった。

「おーいよろこべ！今日はこのクラスに
転校生がやって来るぞ！」

三組担任の、長谷川が声を張り上げてみんなに言う。

「マジで？男？女？」

「イケメン君ならいいなーO（≧∇≦）O」

（バカバカしい…それ位で騒ぐんじゃないわよ）

「残念だったなァ岸辺。男子だ。そして、新川
正解ッ！かなりのイケメン君だぞ！
まぁ、先生の次くらいのイケメンだがな＾＾」

「マジかよっ！なーんだつまんねーの！」

「キャー♪O（≧∇≦）Oマジで？」

「てゆーか何だよ？先生の次くらいのイケメン
って、全然先生カッコ良くねーよ！！」

「「ｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ」」

「ハイハイ静かに！そして、
広瀬お前は減点な＾＾」

「マジかよ？（（（（（；゜Д゜）））））））」

（何なのみんな…くだらない…ウザいよ…）

「そういえば、言うの忘れてた。転校生君は
何と、アメリカから来たんだぞ！たしか…
カリフォルニア州だったかも…
じゃあ、呼ぶぞ！工藤君！入りたまえ！そして
ようこそ！爽やか三組へ！」

（えっ？工藤？アメリカってまさか…）

「アメリカのカリフォルニア州から来ました。
工藤勇斗です。この町には、小学校三年生まで
住んでいました。これから、１年間
よろしくお願いします！」

そこには、八年間思い焦がれた顔があった。

少し癖っ毛のある髪
爽やかな顔立ち
やや長身で、色白。誰が見ても美男子と呼べる
片桐咲のよく知る人物…

幼馴染の工藤勇斗本人だった。

（会いたかったよぉ…勇斗ぉ…）

涙がこぼれるのを我慢しながら、

勇斗を目に焼き付けていた時だった…

「じゃあ～工藤君の席は…あそこが空いてるな。
片桐の隣だ！仲良くしてやれよ！」

「は、はい！！」

神様…私
生きてて良かったです…。・。・（ノД、）・。・。

やっと会えたね…2

「えっと…初めまして。工藤勇斗です。
これからよろしくお願いします。」

ずっと好きで思い焦がれていた、勇斗が目の前にいる。爽やかな雰囲気は変わっていなかった。
でも、『1つ』だけ変わった事があった。
私の事を忘れているらしい。自分はこんなに待って居たのに…忘れた事なんてなかったのに…
名前を言ったらおもいだしてくれるカナ…？

「嫌だなぁ～…ハジメマシテじゃなくて、久しぶり！の間違いでしょ？
あたしだよ？咲だよ？覚えてる？」

忘れられたショックで折れそうになる心を必死に我慢して、元気な声で答えた。

（思い出してくれなかったら、死のうかな…）

「サキ…？カタギリ…片桐…咲……あ～！！咲！片桐咲！思い出した！！」

「本当に！？良かった～…ハジメマシテなんて言われてショックだったよ…」

「アハハッ！悪りぃ悪りぃｗｗ！」

「何だ、片桐お前工藤と、知り合いだったのか？
ちょうどいい…片桐！工藤に、学校を案内してやってくれ！頼んだぞ！」

「わ、分かりました！…」

その後、咲に学校を案内してもらい教室
に帰ったオレを待って居たのは転校生恒例の質問攻めタイムだった…

なんとか、全ての質問を回答して逃げるように
咲と帰った。

「あぁ…つかれた。こんなに疲れたんだな…学校って…」
「すぐに慣れるよ！それより、あたしは聞きた事があるんだけど…
…」

なにかドス黒いオーラが咲から放出されている
「岸辺君が言ってた質問の答えなんだけど…」
「な、なんだよ…？」
「彼女はいますか？って質問だよ？覚えてる？」
そういえば、そんな質問があったような…
「彼女はいないが、Ｇｉｒｌ　Ｆｒｉｅｎｄは居ます。って答えてたよねぇ…どういう事カナァ？」
「いや、フツーの友達だっｔ」
「ふぅーん…そうなの…」
「あぁ、そうだよ。妬いてるのか？ｗ」
「べっ別に妬いてなんかないもん！！」
「それは、さておき…久しぶりだな。
本当に、咲と帰るなんて…まさか、２５ｍ泳げなくて、おねｓｙ」
「それ以上は言わなくていいですぅ！！」
「まぁまぁ、言わせろよｗそんな咲が、凄く綺麗になってて最初気づかなかったんだぜ？」
「ご、ご機嫌取ろうとしても無駄だよ！
無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄ァッ！」

「照れるなってｗｗｗあっもうそろそろ
家に着くから…また明日！じゃあな。」

「うん。バイバイ。」

死んだに等しかった頃の彼女は、もう居ない。

今の彼女は、あの頃のように生き生きしていた。

キャラクター紹介（前書き）

キャラ紹介第一弾です！

キャラクター紹介

工藤勇斗
くどうはやと
♂
好きな食べ物：日本のメーカーのチョコレート：甘い物全般
嫌いな食べ物：果物全部：ブロッコリー（以前虫が付いたモノを食べそうになったため）
性格：活発な男の子。物事は割とハッキリと言う方だが、皆に優しいので嫌われる事のない。ちょっぴりシャイ。仮面ライダーが好き。（平成）
特徴：身長は高いほうで細い。顔は、自称フツメンではあるが、誰が見ても美男子と言う顔立ちをしている。
特技：アメリカでやってたバスケットボール
年齢：１８

工藤祐介
くどうゆうすけ
♂
好きな食べ物：和食
嫌いな食べ物：出張先で食べさせられたシュールストレミング
性格：チャラチャラしているようで、実は真面目。家族思いで素晴らしい父親（自称）妻の、香奈美が亡くなった後も男で一つで勇斗を育てて来た。何だかんだでいい父親。
特徴：長身。年の割りに若く見られる。自他ともに認めるイケメン。
特技：某漫画の主人公の様に『耳の穴に耳全体を収納できる』ドヤ

ッ！
年齢：４５
工藤香奈美
くどうかなみ
♀
祐介いわくアンジェリーナジョリーと、石原さとみとミッフィーを足して二で割り
そして、五をかけた位の美人さん。
没年２７才

片桐咲
かたぎりさき

好きな食べ物：ココア。幼い頃、勇斗に勧められて食べたビスコ。
嫌いな食べ物：ピーマン。
性格：勇斗といた頃は友達も多くて活発な少女だったが、勇斗が転校した時から毎日がつ
まらない物へと変わってしまい、皆から距離を置く様になった。しかし、勇斗が戻って来たため彼女の中のなにかが変わろうとしていた。
特徴：すごく可愛い部類に入る。今まで何人もの男子が告白してきたが全て断って来ている。そのため、ついたあだ名は「絶対令嬢
ブリザードガール
」クラスでは、ハブられてはいないが友達は少ない方。勇斗に対する恋愛的感情はほんの少しだけあるが、まだちゃんと気づいていな

い。
ジョジョの奇妙な冒険という漫画が好き。
特技：家事全般。
年齢：１８

長谷川拓郎
はせがわたくろう
♂

勇斗たちクラスの担任。
熱血。生徒達からも人気がある。

年齢：３８

ある日の日記

○月△日：金曜日
今日はとてもいい事があった。八年間ずっと願っていた願い事が叶ったからだ。
七夕の短冊に書いても、クリスマスイヴの夜にサンタさんにお願いしても叶わなかった願いが今日叶った。
勇人が、帰って来た！！！しかも席も隣！！学校案内までしちゃった！！

久しぶりに2人でお喋りもした。
みんながっつくように勇人のメアドを聞いてるのを見てちょっぴり腹が立ったけど、あたしも聞く事が出来たからよしとしよう！！
勇人は、学校の近くのマンションでお父さんと暮らす予定だったらしいんだけど…
仕事の都合で一人暮らしだって～！！
かっこい～！これってもしかして、ご飯とか作りに行けちゃうかも……！！！！
あたしは、気づいたんだ…勇人が好きって！
そんな事よりも、もっと嬉しい事があった。
勇人が、あたしの事『綺麗になった』って言ってくれた！！！！！！！！！！！！！
ヤバイ！泣きそうだよぉ～。
勇人は、覚えてくれてるかな…
結婚してくれる約束。
ううん…覚えてるよね。
忘れたら、許さないんだから…

よし！明日は、朝早く起きて勇人の家の詳しい位置を調べて一緒に登校するぞー！！

今日は寝まーす！！明日から同じ学校だ…早く明日にならないかな？

翌日

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ピピピピッ！ピピピピッ！ピピピピッ！ガチャッ！

毎朝６：３０にセットしたアラームの三度目で起きる。眠い。スゴく眠い…

「ふぁぁ〜あぁ…」

大きなあくびがでた。それと同時に、頭の中の霧が少しだけ晴れたような気がした。

「ええと…朝風呂に入って、パン食べて、校か…」親父に言われてから気づいたのだがオレは一日の予定をわざわざ口にだす癖があるようだ。まぁ、最初は恥ずかしくて顔から火が出るくらいだったのだが、よくよく考えると口に出した方が頭ん中で整理しやすくて、安全かつ確実に一日を過ごせると思う。

そんな事を考えてる内に、全ての準備が終わり玄関に向かおうとすると、

ピンポーン　ピンポーン　ドンッドンッドンッ

「おはよー勇人ぉ！学校行こ～！」

「うわっ！朝から元気な事。近所めーわくだから、静かにしろよ…」

咲がいた。

たしか住所は教えてなかったはずだ。

「えへへー！元気だけがとりえですから！」

「嘘つけ～オレが転校して来た時、死んだ魚の様な目をしてたぞ？！」

「てゆーかなんで住所分かるんだよ？！」

「幼馴染に不可能はないのです。てへっ☆」

「てへっ☆じゃねーよ！まぁ…いっか。学校行くか。」

「うん！」

「そういえば、勇人はもう決まった？」

「ん？なにが？」

「何部に入るかだよ～。昨日、話したじゃん。」

そうだった…この学校は必ずクラブまたは部活動に参加しなくてはならない決まりがあった。バスケ部に入ればいいと言われたが、バスケは遊びでするくらいがオレとしては好きだ。だから、まだ何部に入るか決まっていない。
生徒会に入っていれば、部活動などは免除らしい。

「そういえば生徒会の人数が足りないんで、募集してるみたいだよ。でも、勇人は生徒会になんか入らないよね？あたしと一緒のお料理クラブに入るんだもんね？」

「お料理クラブはないな…」

「えぇ～？！どうして！？楽しいよ！」

「料理とか苦手で…」

「じゃあ、いつも何食べてるの？」

「買い溜めしたインスタントラーメン。」

「そんな物ばかり食べてたら、身体に悪いよ！今日の夜から、あたしが作りに行ってあげるね☆」

「いや、わるいよ。だいじょーぶ。」

「むぅ。」

「おーい君たち！早く入らないと遅刻するぞ！」

「げ！ヤバ！ダッシュだよ勇人！」

「お、おう！」

なんとか間に合った。それにしても、お料理クラブはキツイよな…

絶対ムリだわ…

そういえば、生徒会がメンバー募集してたみたいだ。面接とかあるみたい。どうせ決まってないんだし、行ってみるか…

ある日の日記（後書き）

次回！新キャラ来ール？

生徒会入会面接

とうとう来てしまった。
今工藤勇人は、生徒会入会の為の面接会場に来ている。何故、生徒会に入るのに面接が必要かって？オレだってそう思ったさ…でも、ここに来て理解した。それと同時にちょっぴり後悔した。

「会長たん…はぁはぁ…」

「もげー！会長もげー！」

「生徒会長は、俺の嫁！」

「いや、拙者の嫁でござるよ！！」

「なにをー！！」

アメリカにいた時から、日本のヲタク文化？は知っていて、面白いなーと思い否定する人の気持ちが分からないくらいだったのだが…ここに来て少しだけ気持ちが分かった気がする…生徒会長を見た事はないのだが、
これだけの人数（ざっと全校生徒の3分の一はいる）が集まるって会長どんな顔してんだ？

「おい、貴様…」

「え？オレっすか？」

（うわっ！絡まれちゃったよ…）

「うむ…貴様だ。」

「は、はぁ…。で、何の用でしょうか？」

「貴様、見たところ何の『力』も持たぬ一般人の様だが…貴様も、面接を受けるのか？」
独特の喋り方の中、面接というフツーの言葉が出て来たため、笑いそうになった。

「ぷwごほん、ごほん！すいません。あ、面接なら受けますけｄ」

「それは辞めておけ！貴様の『力』はまだ覚醒していない！邪気眼を持たぬ一般人如きが面接に向かうという事が、どういう事なのか分かっているのか？我の邪気眼は、『時空移動～クロノスワープ』空間を捻じ曲げ、時を止める事や空間移動などが可能。しかし、その代償にじｂ」

「次の方ー！」

「ひ、ひゃい！！」

なんか怖かったけど、きっと根はいい人なんだろな。

さて、次はオレの番か。

どんな事を聞かれるんだろう？もし落ちたらどのクラブに入ろうか？などと考えてる間に、

「次の方どうぞー！」

「あっ、はい！」

オレの番だ。

トンットンッ…

「入りたまえ。」

「失礼しまーｓ」（うげっ！）

そこには、顔には出していないがかなり不機嫌そうな生徒会長？がいた。

「ｂ、私が生徒会長の五十嵐真琴だ。」

どうやら、生徒会長らしい。なるほど…沢山の一達が生徒会に入りたがるわけだ…スゴく綺麗だ。咲が可愛く見えるくらいに…

「どうした？座らないのか？ｂ、いや私は今機嫌が悪いんだ…早くしてくれないか？まったく…さっきの厨二病といい…チャラチャラした根性無しといい…ブツブツブツブツ……」

厨二病というのは、さっきのジャキガン使い？の人の事だろう。

「あっ…すいません。」

じーーーーーーーーーーーーーーーっ…

長い沈黙が続いている。かなり気まずい。めちゃくちゃ見られてる。

「あの…面接始めないんですか？」

「合格だ。」

「はぁ？！」

「理由は、私が疲れたからだ。さっそくだが君には、会長の私の補佐。つまり、副会長になってもらう。明日からよろしく。今日はも

う帰っていいぞ。」

「え?!ちょ、速すぎじゃないですか?」

「文句があるなら辞めていいんだぞ。b、私としては辞めて欲しくないのだが。」

「え?あ?やります!こちらこそよろしくお願いします!!」

そして、オレは生徒会に入ったのだった…

帰り道。親友との再会

面接の後、咲との帰り道で生徒会に入った事を報告した。
「えぇっ?!勇人、生徒会に入ったの?!」
「うん。面接に合格しちゃってさ。これで部活は、免除だな。」
「そんなー!お料理クラブに入るって言ったじゃん!!嘘つきー!」
咲が駄々をこねる。面倒くささこの上ない。
「言ってませんー!」

「おっ?!お前勇人か?」
後ろから名前を呼ばれたので、振り返ってみるとそこには、

だらしなく制服を着崩した男子生徒が居た。
「俺だよ!俺!俺!忘れたの?隣に居るの咲ちゃんだろ?!何〜?付き合ってるの?」
「付き合ってないですよ。誰ですか?あなた?」
咲の顔が紅くなっているのは気のせいだろう。

「……」

「何だよ！2人して忘れちゃったの？昔よく三人で遊んだじゃん！本当に覚えてないの？！」

「すみません…」

「いいんだよ。今から名前言うけど、2人共思い出してくれなかったら泣いちゃうよ？！」

「んじゃ、言うぞ…城花涼介
じょうかりょうすけ
どう？思い出した？！」

「「あ～～～！！」」

2人同時に驚きの声をあげた。彼、城花涼介は2人と保育園からの付き合いであり、よく三人でイタズラなどをして遊んでいた仲だったからだ。しかし、一つだけ違う所があった。それは、

「涼介ってあの涼プーか？！」

「小学校二年生にして体重４５ｋｇ越えという偉業を成し遂げた愛すべきポッチャリの？ちょ

ー痩せたじゃん！涼介君痩せてスゴくカッコよくなったね。」

「まぁね。いろいろあって痩せたのさ！にしても勇人お前帰って来てたなら連絡くらいよこせよ！」

「あはは！悪りぃ悪りぃ！」

「久しぶりに三人揃ったんだから、遊ぼうよ！！」

そして、懐かしいメンバーで遊びまくり連絡先をお互いに交換しあった。涼介は私立の高校に通っているらしく、しかも涼介には彼女が居るらしい。涼プーに先を越されるなんてなんか虚しい。

涼介と別れ、家が近づいてきた。

「じゃ！明日ね。勇人！」

「おう！明日な！咲！」

この時、勇人は知らなかった。ずっと自分達の後を付けていた人物の存在を…

ストーカー日記ｖｅｒＢ　　秘密

○月☆日（月）
今日、転校してくる予定の生徒をチェックした。スゴくカッコよかった。ぼくの好みのタイプの顔だった。

○月＊日（火）
昨日チェックした生徒の顔が頭から離れない。一目惚れというヤツだろう。勇人という名前らしい。
勇人の事がもっと知りたい。会って話をしたい。
そうだ。法に触れる事はしたくないのだが、盗聴器という物を買ってみよう。住所は既に知っている。楽しみだ。

○月〆日（水）
無事に仕掛ける事に成功した。寝ている勇人を起こさずに仕掛けるのはドキドキした。
勇人の寝顔を拝む事も出来た。スゴくかわいい。夜這いをしたくなるのを抑えて、キスだけで済ませた。僕って我慢強いな。それにしても、幼馴染とか言って僕の勇人に擦り寄るごみ虫の存在が気になる。まぁ、虫は所詮虫。放っておこう。きっと、僕のキスが始めてだろう。

○月$日（木）
しばらく、勇人を観察していて分かった事がある。勇人は朝の予定を口に出して確認する。その甘い声で僕に愛を囁いて欲しいものだ。
帰り道、勇人を見かけた。やっぱりごみ虫も一緒だ…予想以上に厄

介な虫だこと。しかも、虫が一匹増えた。なんで勇人はあんな虫達に囲まれて楽しそうにしてるの？
なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？勇人の笑顔は僕だけの物。まぁいい…明日からは勇人と一緒だ。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

今日から、生徒会としての活動が始まった。

生徒会の活動はラノベやアニメなんかとは違って、意外に地味な作業だという事が分かった。放課後も活動があるので、咲とは一緒に帰れない日も出てくるだろう。夕陽が校舎内をオレンジ色に染める…他の役員達は作業を終えて下校してしまい、残ったのはオレと会長の真琴だけだ…気まずい。かなり気まずい。

「……い……おい…聞いているのか？」

「ふぇ？あっ！何でしょうか？」

とりあえず、目上の人なので敬語で話す様にしている。

「まったく、ぼうっとしてもらっては困るな…それと、その言葉遣い辞めてくれないかい？b、私たちは同学年じゃないか。」

「あっすみまｓ」

「ほらっまた！クス…君は面白いな。」

「ごめん。やっぱり何か変な感じがする。」

「いいんだ…ところで君は何か秘密はあるかい？」

「まぁ、人並みには…」

「b、いや私の秘密を教えるから君のも教えてくれないか？」

「えぇ？！必ず？」

「嫌なのか？残念だ…誰にも言わないのに…」

スゴく悲しそうな顔をしている会長を見てると心が痛くなった。

「分かった！分かったからそんな顔しないでよ！」

「じゃあ、言いますよ。絶対引かないで下さいね！！絶対ですよ。

こう見えてオレってスポーツやってたんで、結構筋肉は付いてる方なんですよ。細マッチョってヤツです。それで、たまに右腕の血管がバキバキに浮き出てる時があるんですよ。それを、眺めるのが好きなんです。他の人じゃなくて、自分だから良いんです。

あぁ、もう！！！だから言いたくなかったんだ！！」

「いや、すまない。面白過ぎて言葉が出てこなかった。なるほど。つまり君は、『自分の血管フェチ』なのか。面白いな。ほほう…『自分の血管フェチ』なのか！！」

「ヤメテー」

「では、次は私の番だな。ふぅ…私なんて疲れるな。やっぱり『ぼく』がしっくりくる」

「はぁ？」

「いや、だから自分の事をぼくと言うんだよ。女の子なのに…変だろ？」

「いや。別に変じゃないでしょ？」

「本当か？君は認めてくれるのか？嬉しい。嬉しいよ。君の前でなら、ぼくと言っていいかい？」

「全然ＯＫですよ！」

「そうか…ありがとう。実は後一つだけ秘密があるんだ…聞いてくれるか？勇人。」

「何ですか？急に新たまっちゃって…」

「ぼくは、一目見た時から勇人の事が好きだった…」

「えっ？…」

オレンジ色の光が二人だけを包みこんでいる。二人だけを…

ストーカー日記ｖｅｒＢ　　秘密（後書き）

気がつくと、自分の腕を眺めてた…

あぁっ！もう！引かないで下さいよ！（、・｜・、）

告白

「え？！」
オレはすぐには会長の言葉が理解出来なかった。２人の秘密を言い合って、それから急な告白だ。無理もない。ぶっ飛んでいる。

「いやなのか？ぼくの彼氏になるのは…」

「いや！？彼氏もなにも、会ってまだ一日しか経ってないんですよ？！」

「一目惚れってヤツだ。悪いか？」
そんなドヤ顔で言われても…

「お…おぉ……」
彼女の素直さに思わず、感嘆の声をあげてしまう。

「それに勇人はアメリカに居たから知らないと思うが、うちの父は『五十嵐コーポレーション』の社長で、ぼくは令嬢なんだ。ぼくと一緒なら美味しい食べ物や、欲しい物のだいたいは手に入るんだぞ？損は無いとおもうが…」

『五十嵐コーポレーション』そういえば、今朝のニュースで特集されてたあの会社か…人工衛星や、電化製品…今話題のスマートフォンまで作っているらしい。

「そんな…ますますオレと不釣り合いです。もっと相応しい人がい

るはずですよ！」

「ぼくには君しかいないんだよ。」

「いや、でm」

「いやだ！ぼくは勇人じゃなきゃいやなんだ！！これから、君だけを見て生きていく。これから、君だけの事を考えて生きていく。もし、君が望むのならぼくの処j」

「ごめんなさい！！考えさせて下さい！！気持ちの整理がつかなくて…一日だけ考えさせて下さい。」

「分かった…いい返事を期待している。仮にぼくを振ったとしても、ぼくは君を諦めない
。さっきは取り乱してすまなかったな…」

「いえ。大丈夫ですよ。じゃあ、オレはこれで。」
さっきは、考えさせてなんて言ったが…正直嬉しかった。彼女はスゴく綺麗で、どう考えてもオレなんかとは釣り合わない高嶺の花だ。それと、彼女に少しだけ恐怖を感じてしまった。どうして、出逢って一日のオレに告白なんてしたのだろう。何故そんなに必死になれるのだろうと…彼女はオレの全てを欲しがっている。そんな気がした…いい意味でも…悪い意味でも…

告白（後書き）

やっと、追いついた！！

明日から、話を進めますね！

目撃

「勇人が来ない。遅い。遅すぎる。」

咲は、今日から生徒会の仕事がある勇人の帰りを待っていた。

「思いきって、中に入って手伝っちゃおうかな？〜！いけないいけない！邪魔しちゃ悪いもんね…これからは、一緒に居れると思ったのに…生徒会に入るなんて。あんまりだよ…」

（本当に遅い…もう帰っちゃおうかな？そうだ！こっそり作った合鍵を使って、勇人の家に入っておこう！そして、夕ご飯作って待っていよう！驚くだろうな〜勇人！）

「ぼくは、一目見た時から勇人の事が好きだった…」

（えっ？）

そんな事を考えてた彼女の耳に飛び込んで来たのは、生徒会室の中からの話し声だった。

「え？！」

彼女の頭の中が、真っ白になった。

（会長が、勇人に告白？嘘？嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘
嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘
嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘
嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘
嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘
嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘

噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓
噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓
噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓
噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓
噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓
噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓
噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓
噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓
噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓噓
噓噓噓噓噓噓噓！！！噓だって言ってよぉ！！）

そんな言葉を何回自分の心の中で叫んでも、事実は変わらない。

（そうだ…今から勇人の家に行くんだ。私の勇人の家に…先に帰って、勇人の大好きなご飯作って待っておくんだ…勇人！！！！！！！！！！！！！！！！！！）

「アハ…アハハ…アハハハハハハハハハハハハハハハハハヒハハハハハヒハハハハハ…！！！」

歪んだ笑みを浮かべ、深く濁った眼をして、一人帰り道を急ぐのだった…

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「ふぅ…ちゃんと言う事が出来た。これが告白か…ドキドキするな…明日の返事が楽しみだ…今日は眠れないな。もし、ぼくの告白を断ったら…いっその事、『監禁』でもしてしまおうか…ククッ…」
（そういえば、教室の外にゴミ虫がいたな。ぼくの告白を見せ付けてやれたかと思うと実に気分が良い！清々しいな。）
勝ち誇った顔で笑みを浮かべる彼女の眼もまた、『ゴミ虫』と同じように深く濁っていた。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

帰り道。工藤勇人は考えていた。会長からの告白を受けていいものか？という事を

確かに嬉しい。嬉しい！あんなに綺麗な女の子から告白されて、最悪！！なんて思うバカはいないだろう。だけど、この告白を受けてしまってなにか変わってしまう物がある気がする。良い方ではなく、悪い方に…
断ってしまうのも、あとあと気まずくなるだろうし…
付き合うとなると、咲はどうなる？

「あれ？家の電気がついてる。消したはずなのに。」

（ドロボウかもしれない。）
落ちていたカサを手に取り、慎重に玄関へと向かう。

「？～？～♪～？」

鼻歌が聞こえる。なにか料理でも作っているのだろうか？良いにおいもする。

人ん家に忍び込んどいて、料理まで作ってるだと？……狂ってる。

勇気を振り絞り、ドアを勢い良くあけた。

動き始める狂気…

「だ、誰だ！！！」

「ひ、ひゃあい！！！！」

ドロボウが居ると思い、勢いよくドアを開けたオレの眼に写ったのは楽しそうにカレーを作っていた咲の姿だった。

「なんだ…咲か…って、何で中に入ってるの？！」

「あ、あの、その、カギが開いてて…ドロボウ入っちゃいけないと思って…中で勇人のご飯作って待ってようと思って。ゴメン…」

（合鍵作ったなんて言えないしね。）

怒鳴って入ったため、スゴく怯えている。

「あっ。そうなの？！でもカギなら閉めた気がするし…」

「いいや！！開いてたよ！ドジだなァ…」

「そうかぁ？」

「あっ！もう、カレー出来ちゃうから座って待ってて！」

「うん。ありがとう。」

その後、咲の作ったカレーを食べた。

とりあえず美味しい。さすが、料理クラブに入っているだけはある。

「ねぇ！ねぇ！、味…どうかな？」

「う～～～～ん…

０点。」

「ふぇ…嘘…折角作ったのに…」

「冗談だよ！！冗談！！スゴく美味しい。辛い物苦手なオレの為にちゃんと辛さは控えめ…って、なんで辛いの苦手って知ってんだ？」

「良かったぁ～。えっ？！そんなの当たり前だよぉ～。見てれば分かるって！」

「そうか。ありがとな。」

「あと一つ。このカレーさなんかふつーのカレーと違う感じがするんだけど、何か入れた？。」

「まずかった？」

「いや、不味くはないけど…なんか不思議な味がするよ。」

「愛がこもってるからね！」

「アハハ！面白いね。今度、材料教えてよ。」

「あ、あのさ…話があるんだけど…」

「ん？何？」

「今日、家にはあたし一人しか居なくて不安なの。だから、今日は泊めてくれると嬉しいな…って。駄目だよね…迷惑だもんね…」
家に一人という事は、ドロボウや不審者が入り込んできたら咲が危ない。答えは一つだった。

「分かった。じゃあ、臭いかもしれないけど寝る時はオレのベッド使ってな。オレは、親父の使うから。」

「全然臭くなんかないよ…むしろ……い匂……よ…」

「何か言ったか？」

「ううん！何でもないよ！」

「着替えとかはどうするの？」

「大丈夫！ちゃんと持って来たから！今日一日よろしくね！」

おかしい…ちゃんと持って来たって、まるで最初からオレの家に泊まるつもりで来たみたいじゃないか…
それに…家に来てみると、カギが開いていたってどうしてオレの家に来ようと思ったのか…？咲には、生徒会の仕事があると言ったので咲より速く家に着かないなんて分からないはずがない…しかし、

乗り気な彼女を追い出す事は、出来ないので泊める事にした。

「そ、そうか…準備いいんだな。」

長い長い夜が始まる…

始まる夜…近づく恐怖。（前書き）

ちょっと体調が悪かったので、
久しぶりの投稿になります。m（＿＿）m

始まる夜…近づく恐怖。

やっぱりおかしい。考えてみれば考えてみる程に『奇妙』。何故咲はオレの家に来たのだろうか？やっぱり理由が思いつかない。いくら幼馴染だから、カギが空いてたからという理由で普通家に入るものなのだろうか？少なくとも、アメリカではそうしなかった。

「おーい！勇人勇人！聞いてますか～？」

「うぇ！？あっ何？！」咲の様子から想像するとオレは相当考え込んでたらしい。

「急に怖い顔して考え込むから、ビックリしちゃったよ。何かあったの？相談乗ろうか？」

オレは、会長の真琴に告白されたというのを言いそうになったのを抑え、出来るだけ自然に「なんでもないよ。」と答えた。最近思い出したが咲は昔から変に勘が鋭い所があって隠し事などもバレてしまうくらいだった。

「ふぅん…そう。」

「そ、そうだ、お風呂なんだけど先に入っててていいからね。お湯の出し方は分かる？脱衣所の所のボタンを押すんだよ。今は３８℃だけど熱かったら温度下げていいから。」

「わ、悪いよぉ。勇人から入って。」

「オレは、学校の書類をまとめなきゃ寝れないしさぁ…遠慮すんなって。」

「生徒会のお仕事？」心配そうな眼でこちらを覗き込む。その大きな眼で自分の心の中を見透かされてるようで鳥肌がたった。

「う、うん。大丈夫だから…速く入ってきなよ。」

「うん！分かった。お言葉に甘えちゃうね！」優しい笑顔をオレに向けると、嬉しそうに脱衣所までトテトテと歩いていった。この笑顔を見ると、さっきまでの考えは何処かに飛んでった。

「さぁて。仕事仕事！」オレは机の上の書類をまとめる作業を始めていった。

○○○

服を脱ぎ、脱衣所のボタンを押し私は風呂に入った。さっきの様子だと、勇人は真琴に告白された事で悩んでるようだった。

「めっちゃ同様してたし…勇人ってばウソつくの下手すぎ…」そう小さく呟くと、私は髪を洗う為に、シャンプーを手にとった。そして、髪を洗おうとしたその時。私は見つけてしまった…

「えっ？なにこれ？」

それは、普通にみれば、勇人のシャツだろう。でも、なんでこんな所に？ふつーシャツを洗う時は、洗濯機に入れて洗うはず。どうしてお風呂場なんかにあるのだろう。見た所、目立った汚れはついていない。

そして、

どうしてボタンのすきま

からケーブルがでている？

（勇人があたしの裸を撮ろうなんて事はしないはず…じゃあ、勇人の？でも…誰が？何の為に？）

私はソレをボタンから引きちぎると、外の闇の中に放り込んだ。

シツモン

「咲のやつ、遅いな…なんかあったのかな？」風呂に入ってから1時間半以上経っているのだ。昔、親父が言っていたが『女の子はなにかと男を待たせる生き物だ。それを耐えれるようになったら一人前。』だっけ？これはいくらなんでも異常だ。

「ちょっと、ドキドキしちゃうけど心配だし様子見てくるか。」資料を纏め終わったオレは、咲のいるお風呂場へ向かった。

○○○

「ふぅ…風呂場だけで、5個か…」私は、『ソレ』を見つけた後他にもないか調べてみた。結果は、言った通りだ。一体誰が？何の為に？勇人が、私の裸を撮るためなら許そう。むしろ、見せつけてやりたい位だ。しかし他者が、勇人の全てを見たり聴いたりという欲の為に仕掛けたのなら、私はソイツを許さない。

「おーい？咲？大丈夫か？」脱衣所の扉の向こうから心配した勇人の声が聞こえる。

「えへへ…大丈夫だよ。勇人んちのお風呂気持ちよすぎて、長湯しちゃった。今から上がるね。あたしの裸みたいでしょ？？」

「うわっ何言ってんだよ?!全然見たくねーし!!オレは、日本に帰ってきて、悟りひらいちゃったから!賢者になっちゃったから?!全然コーフンしないし!!キ、キョーミも無いし!!」

嘘だ。１００パーセント中、２００パーセントは動揺しているだろう。動揺しすぎて、声が裏返る所もあるくらいにね。

まぁ、そんな所が可愛くて大好きなんだけど…

（勇人は自分の身に迫る危険に気づいてないかもしれないけど、あたしが守ってあげるね!『幼馴染』として、そして、『未来のお嫁さん』として…）

○○○

トントン…

「勇人ぉ?まだ起きてる?」

寝る準備をしていたオレを訪ねて来たのは、パジャマに着替えた咲だった。

「ごめんね…こんな遅くに…一人じゃ寝れなくて。」

（やっべ!!パジャマ姿かぁいいよぉ〜〜!!!!!お持ち帰りぃ

～～～！！ってここ自分家か…）なんて、アニメ化された某サウンドノベルのヒロインのような事を思ったのは置いといて。

「全然、問題ないって！！あっ、飲み物持ってくるね。コカコーラがいい？それとも、ペプシ？」

「どっちも、コーラじゃん！！あたしは歯磨きしたからお水でいい。勇人は、まだ歯磨きしてないの？」

「うん。今からしようと思ってた所。じゃあ持って来るから、ちょっと待ってな。」

○○○

「ここは確か、お父さんの部屋だったわね…ここにはないようね…さっき勇人の部屋を見たら１０個はあったわ…やっぱりストーカーみたいね…」まぁ、勇人の部屋のも引きちぎっておいたけど…

「おっ待たせ～！はい！」

「ありがとぉ～！なんかテンション高いね勇人」

「まぁね！深夜のテンションなんで！ハイにもなるよ！ＵＲＹＹＹ！！！！」

「あははっ！それ、ディオだよね？」

「うん！咲、このまんが好きだったろ？オレも読んでみたんだ。どうかな？」

「うーん…やっぱり、URYYYYじゃなくてWRYYYYだよね！」

「な、何が違うんだ？」

「ふっふっふ…お主はまだまだ未熟よのぉ～。Uではなく、Wなのだよ。発音さ！きっと！」

「だからどう違うんだ？！さっぱり分からん」

「だからURYYYYじゃなくて、WRYYYYだよ！」

「あああ！！わかんね～！」

その後、あたし達は他愛ない会話を楽しんだ。
そして、あたしは本題とも呼べる事を聞くことにした。

「ねぇ。勇人さぁ、最近変な事ない？」

「なにが？どんな風に？」

「誰かに見られてる気がする。とか、後をつけられるとか…」

「なにそれ？怖い。けど、そんなのないな。」

「そう…じゃあ、もう一つね。

勇人さぁ……

会長に告白されたでしょ？」

外では、涼しい夜の風が吹いている。

結論

「会長って真琴さん？そ、そんな事あるわけないじゃん！な、なははは…」（何故？何故知っているんだ？あの時は帰ったんじゃなかったのか？！）

「あたし、嘘は嫌いだな。聞いてたよ。全部。」

「だから、そんなんj」

「嘘よ！！！！！二度も言わせないで！！！！！あたし、嘘は嫌いなの。ねぇ～どうして嘘なんてついたのかな？あたしに言っちゃ気まずい理由でもあったのかな？」

「わ、わかったよ。嘘ついて悪かったよ。ごめん。」

「はぁ…はぁ…分かればいいよ。でも、なんで嘘なんかついたのかな？あたし、わかんないから納得できないよ。」

「ゴメン。隠すつもりもなかったし、急に聞かれてしまって咄嗟についてしまった嘘なんだ。今から相談する予定だったんだよ！」

「そう…わかった…返事…どうするの？」

数分経ってオレは結論をだした。

「オレは……

断ろうと思う。」
考え抜いた末の結論だった。確かに、真琴さん程の美人に告白されたのだ。断る方が罰当たりかもしれない。しかし、彼女程の人物にはそれ相応の人物が居るはずだ。オレみたいなのでは釣り合わない。それに、オレには咲がいる。いるといってもただの幼馴染。それだけの関係だが、それでもいい。それだけで幸せなのだから。それ以上は望まない。

「そっそうだよね。勇人には、持ったいないくらいだもんね！……も、……しぃ…も。」

「そうだね。」最後の方に咲が何か言ってた気がするが、もう寝る！と言って聞かせてくれなかったので寝る事にした。

そして、朝がやってくる。

結論（後書き）

やっぱり、小説って難しいですね。

次は、キャラ紹介Ｐａｒｔ２予定。

約束＋ストーカー視点

ジリリリリリリッ！！！！！！！！
普段聞き慣れない音で目が覚めた。スゴくうるさい。確か、家の時計はデジタジリリリリリッ！こんな音はリリリリリッ！！出なリリリリリッ！！！はリリリリリッ！！
あぁっ！！！もう、うるさいなァッ！！
リリリリリッ…カチッ！
オレが時計を止める前に、咲が目を擦りながら時計を止めた。
「おはようございます。勇人…ｚｚｚ…」半分寝てしまっている…
「おはよう…って寝ちゃってるじゃん？！おーい！起きろ起きろ～」ほっぺたをぺちぺちして目を覚まさせる。
「ん～…痛いよぉ～…」良かった…どうやら目覚めたようだ。
「この目覚まし時計ってさぁ～…咲の？？」
「うん。どーしたの？」
「いや…スゲー音だなって思ったんで。」それに、この模様だ…可愛らしい花柄。咲にピッタリだ。
「でしょでしょ～！あたし、寝坊ばっかりしてたから。このくらいの音じゃなきゃ起きれないの。あっ！ごめんね。迷惑だった？」

「いや。大丈夫だよ！オレもこの位の時間にいつも起きてるからさ。」

「そうなの？良かったぁ。この時計ね、命の次に、大切な物なんだ…」

「へェ～。なんで？」

「覚えてないの？」

「えっ？」覚えてるもなにも、オレとこの時計の接点が見つからない。

「忘れちゃってるの？教えてあげるね！
この時計。勇人が、誕生日プレゼントとしてあたしにくれたんだよ！！」

「マジで？！でも…オレが帰ってきたのは最近だから…相当昔の物じゃないか！」

「うん。止める時も、優しくボタン押したし、壊れたら直して使ってたの…叔父が時計屋さんだから…直してもらったり…」そう言う咲の顔は少し赤い。

「そっか…ありがとな。忘れててゴメンな。」

「あたしこそ！！あたしは貰ってばっかりで…あたしも、プレゼントあげようと思ったんだけど…その日に勇人は引っ越しちゃって…だから…今年こそ、絶対渡すんだ！！って勇人が帰ってきた時決めたの。」

「じゃあ、楽しみに待ってるからさ！」

「うん！！約束だよ？」

「おう！約束な！」

○○○

「ふん！何が約束だ！！害虫如きが…」ぼくはスゴく腹が立っている…誰に？『誰に』という言葉の使い方は正しくない。こっそり合鍵まで作り、その上図々しく勇人の家に泊まり込んだこの『害虫』にだ。『誰』というのは、人を指す言葉。したがって、この蟲には使ってはいけない。

「しかし、盗聴器と、カメラの殆どが壊されてしまった。残ったのは、盗聴器と勇人の部屋のカメラ一個ずつだ…害虫だからと油断していたが…それに…勇人は、ぼくの告白を断るつもりらしいな…おもしろい…」ぼくは、執事を呼ぶ為のコールボタンを押した。
五十嵐家の人間は、このコールボタンを押して執事を呼ぶ。家族一人に一つずつ、配られており父、母、ぼくに一人ずつ専属の執事が

いる。このシステムにより、仕える執事の負担を和らげより良いサービスが出来るようになっている。因みに、五十嵐家の人間は執事に頼る事をあまりしないので執事も楽だろう。する事と言ったら、父と母の仕事の秘書役くらいだ。家事などは、家政婦がたくさんいる為する事はない。もちろん、家政婦にも負担はかけないように最善の努力をしている。

「お呼びでしょうか？お嬢様。」優しい声ででぼくに話しかけるこの男性は、
執事の冴木。ぼく専属の執事だ。

「あぁ。ぼくが前に話した事。覚えているかい？」

「プロジェクトHでございますか？」

「そうだ。実行する事にした。作戦開始日時は、来週の月曜日。夏休みが始まるからな。」

「かしこまりました。」

「i5達にも、連絡してくれ。」

「かしこまりました。」

「下がっていいぞ。」

「お嬢様。一つお聞きになってもよろしいでしょうか？」

「なんだ？」

「本当に、あの様な男で良いのですか？お嬢様には、もっと素晴らしい男性が世の中にはいるはｚ」

「たわけ！！！ぼくが愛しているのは勇人だけだ！それ以外の男など興味がない！！いくら冴木でも、怒るぞ！」

「失礼しました。以後気をつけます。」そう言い、冴木は部屋から出て行った。

「来週が楽しみだ。ククククッ…」

約束＋ストーカー視点（後書き）

キャラクター紹介しようと思ったのですが、紹介するキャラクターが少ないので本編を進めることにしました（；Д；）

冴木の言葉書くの難しい（・・―・、）

プロジェクトH

長かった学校も終わり、気づけば放課後になっていた。生徒会室に向かうと、そこに会長の姿は無かった。

「あれ？おかしいな…たしか、ここで合ってたはずだけど…」そう…オレは昨日告白された。相手はこの学校の生徒会長であり、かの五十嵐コーポレーションの令嬢さん。五十嵐真琴にだ。彼女は、容姿端麗。才色兼備。といった言葉が似合うような、まぁ…一言で言ってしまえば完璧超人（パーフェクトちょうじん）なのだ。

そんな彼女に告白されたのだが、オレは断ろうと思う。彼女にはもっと相応しい人が居る筈だ。オレなんかが付き合ってしまえば、彼女だけでなく、彼女の親族にまで迷惑を掛けてしまうだろう。

それに、オレには咲がいる。この告白を受け入れてしまえば、今の楽しい日常が壊レテしまう…そんな気がして…

「ん？手紙だ…」机に、可愛い封筒に入った手紙がある。中には、

ヘヤカラデテ。

指示に従う。部屋から出ると、さっきまでは無かった手紙が廊下の真ん中に落ちている。

ガッコウカラデテ。

これも指示に従う。だって、従わなきゃ会長に返事を言う事が出来ない。

「すみません。君が勇人君？」

「へっ？！何ですか？！」急に知らない女の人に話しかけられたため吃驚してしまう。

「この手紙、貴方に渡して欲しいって頼まれたのよ。」

「そ、そうなんですか。有難うございます。」

「いえいえ…」

手紙の内容は、

ナギサチョウシゼンコウエンニキテ。

渚町自然公園…昔、オレと咲がよく遊んだ公園だ。結構広い公園だったため、咲がよく迷子になり泣いていたのを覚えている。

場所は、結構遠い。　　よし…行くか。

公園に着く頃には辺りは薄暗くなっていた。

「おっかしいなァ…人一人いやしない。」嫌な予感がする。

自販機の灯りが、薄暗い公園内の散歩道を照らしている。そこにポツリと手紙が落ちている。

きっと、会長がまだ近くに居るのだろう。とりあえず拾って中身をみる。

ウシロ

「え？」

ガンッ！！！！

振り返る寸前に後頭部に強い衝撃を受けた。

「あはははははははは！！やったぁ！ぼく出来たよぉ！プロジェ

クトH大成功ダァ〜！！あははハハハハはははははあはあはあひひひ
ひひはひはひあはあはははは！！！！」

気が遠くなる中オレが聞いたのは、ひぐらし達の鳴き声と、狂った様な笑い声だった。

○○○

○月×〆日

今日は凄く気分がいい。ぼくが1番欲しかったものが手に入った。

まさか、勇人があっさり来てくれるなんて…

ぼく嬉しいよ。

今から、愛しの勇人の所へ行って来ます…

プロジェクトH（後書き）

監禁√オン！！

フタリキリ

「よしっ！今日も勇人ん家に行くぞ！！」
あたしは張り切って勇人の家に向かう。明日から夏休みだ。今日は、勇人の家に泊まってみようかな？

「お邪魔しまーす。……あれ？まだ帰ってなかったのか…そうだ！部屋の掃除とかもしておこう。」あたしは、最近勇人から家の合鍵を貰った。あたしがコッソリ隠し持ってた物と合わせて二つ目だ。これは、気があると見ていいのかな？かな？

「？～？～♪…Hな本とか見つけたらどうしよう？／／」あたしは慣れた手つきで掃除をする。

「ん！？こ、これは……なぁーんだ…ジャンプか…」ベッドの下に置かれてたから誤解しちゃったよ…

早く帰ってこないかなぁ～？
今日の夕飯は、勇人の好きなハンバーグにしよう。

○○○

「ん……？ここは？」目の前には、白い天井。どうやら、病院のようだ。

「あれ？なんでオレ病院なんかに？ってなんだ？！コレ！？」違った。ここは病院なんかじゃない。何故なら、オレの右手、左足には

頑丈な鎖がベッドの柵に繋がれていたのだから。

思い出してみる…そうだ。オレはあのとk、

「目が覚めたようだね。勇人。」急に部屋に入って来たその人物の声でオレの思考は止まってしまう。まぁ…いい。これでハッキリした。

「なんで、なんでこんな事するんですか？会長？」そう。彼女だ。五十嵐真琴。オレはあの時、彼女に気絶させられて此処まで運ばれたのだろう。

「『会長』…なんて、冷たいなァ…ぼくには、『真琴』っていう名前があるんだ。名前で呼んでくれ。」

「そんな事より…コレ、解いてくれませんかね？」繋がれている手錠に目配せをしながら話す。

「何を言ってるんだい？やはり君は面白い人だ。大好きな勇人を逃がしてたまるものか。ずっと、ずっと…

ハ　ヤ　ト　ハ　ボ　ク

ダ　ケ　ノ　モ　ノ　ダ。

愛してる。大好きだ。好き。好き好き。大好き。好き。」呪詛の様に愛の言葉を呟き続ける彼女はハッキリいって怖い。とりあえず、離す気はないらしい。

「ぼくはこんなに勇人が好きなんだ。もちろん。勇人もぼくが好きだろう？昨日、ゴミを家に泊めたらしいな。あんなゴミと一緒にい

ると、勇人自身が腐ってしまうぞ？ぼくが浄化してやる。」ペロリと頬を舐められる。鳥肌がたつ。ゴミ？昨日泊めた？

「昨日泊めたゴミってまさか、咲の事ですか？咲はゴミなんかじゃありませんし、なんで会長が知ってるんですか？！」

「何を言ってるんだ？ぼくは君の事なら全て知っている。３日前に、ジャンプという漫画雑誌を買ったよね？昨日のご飯はカレー。ゴミ虫が作ったカレーだったね。ん？待てよ？それを食べた訳だから、口の中も、内臓も、毒されていってしまうのでは？これもだ。これも浄化シナキャ…」

驚いた…彼女はオレの最近の行動パターンを全て知っている。つまり、何らかの形で、『見たり』『聞いたり』している。鳥肌なんてものじゃないぞ……日本に来てから今日まで、ずっと監視され続けていたのか？

「フフフ…可愛いよ。その顔も…大好きだ。」

オレは、どうなってしまうのだろう？

ハンバーグ

「よしっ！出来た！のはいいけど…少し作り過ぎちゃったかな？」目の前には、山の様に積まれたハンバーグハンバーグ…ハンバーグハンバーグハンバーグハンバーグハンバーグ…

「そうだ！涼介君呼ぼう！彼女も見てみたいしね！」携帯を取り出し、電話を掛ける。

トゥルルルルッ！トゥルルルルッ！

「もしもし？涼介君？」

「生憎、涼介は手が離せません状況なので用件ならばこの私に。『ちょ！手の接着剤剥がしてくれよ！かぶれるぞ！？』」綺麗な声だ。聞き惚れてしまう様な声。遠くで涼介君の声が聞こえた様な気がした。

「で、用件は？『痛い！痛いって！咲とはそんな関係じゃないって！ね？その手に持ってるの捨てようか…？それは、オジサンオススメシナイナ…ナハハハハ…』」

「あの～…ハンバーグ作り過ぎてしまって、良かったら一緒に食べないか？って。」

「『えっ？ハンバーグ？！行こuフゴォッ！』分かりました。涼介も行きたいと言っているので。場所は？」

「勇人の家です。涼介君がわかります！」

「分かりました。すぐにでも。」プーッ！プーッ！

後は勇人を待つだけだよね。遅いなぁ～…

○○○

「ハァ…ハァ…勇人ぉ…ぼくは、好きな物は最後まで取っておく派なんだ…だから、『アレ』はまだ我慢だな…でも…これ位は良いよね？」監禁されて数十分がたった…オレは今会長に乗られている…騎乗位という奴か？

「辞めましょう…こういう事。お願いしますよ…ねぇ…かいｔｙ」

「喋るのはその口だね？…」はむっ…んちゅ…はむ…れろぉ…

オレの言葉は会長に遮られる…どうして…？

クソッ！鎖さえ解ければ…

「ハァ…ハァ…美味しいよ…勇人の口…甘くて…これで口内は浄化完了だ…逃げようなんて気は起こさない方がいいぞ？ぼくからは逃げられない…アハハハハハッ！」

「そうだ！君はハンバーグが好きだったよね？知ってるよ？作ってあげよう…ちゃんと作るからね？」

「か…会長…」

オレ…助かるのかな？

糸口

「♪～♪～♪。」ぼくは愛情を込めて挽肉をこねる。だって、お腹を空かせた勇人が待ってるのだから。

ガチャッ！！ガチャッ！！ジャラッ！

「クソッ！外れねぇ！！」勇人が鎖を解こうとしてる様だ。無駄なのに…ぼくからは逃げられない。

ガチャッ！ジャラッ！ジャラッ！ガチャッ！

フフフ…抵抗する勇人も可愛いな。きっといつか、ぼくといる事だけが幸せと分かってくれるはず…でもちょっとだけ…

ウ　ル　サ　イ　ナ。

「勇人。あまり煩くするとぼく、怒るぞ？うっかり手が滑ってこの包丁が勇人に刺さってしまうかもな…」嘘だ。ぼくが大好きな勇人に傷などつける筈がない。

「ヒッ……」静かになった。素直な所もまた可愛い。

「さて、今日は勇人が大好きなハンバーグだ。沢山作るから残しちゃ嫌ダゾ？」

「♪～♪～♪」静かな部屋の中、唯一聞こえるのは彼女の鼻歌。

○○

「クソッ…鎖を外すのは無理そうだ。」絶望と恐怖の中、彼は震え

ていた。

「それより…さっきの会長の言葉…オレを殺る気だ…ここにいちゃ命が危ない。」

（ッ！！あれは！！）オレは見つけた。この状況を抜け出す唯一の希望を…

○○○

「ッ！痛いな…でも、これでぼくと勇人はヒトツニナル…フフフ…」彼女の腕からは一筋の紅い線。

「♪～♪～♪。」

ハンバーグの完成までもう少しだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5983x/

もう君を離サナイ

2011年12月20日17時52分発行